たくみ

T A K U M I

No.032
平成25年6月●夏号
信州名匠会

（題字：故　池田三四郎　前名誉会長）

尾張徳川～近代
名古屋の建築からものづくりを学ぶ

信州名匠会研修旅行「名古屋～歴史･文化に触れる旅」

信州名匠会の平成24年度研修旅行は、11月10・11日に23名が参加して行われた。今回は、平成21年から約150億円の巨費を投じて始まった「名古屋城本丸御殿」の現場見学会をはじめ、尾張徳川の歴史から近代建築の名作まで、身近にありながらなかなかじっくり観ることのなかった名古屋を満喫する旅となった。

名古屋城にて

史実に忠実に復元することで、匠の伝統技術・技法を継承

名古屋城本丸御殿　棟の瓦は三州高浜産

早朝長野をたち、最初に、徳川美術館・徳川苑を見学。午後見学する本丸御殿の資料を含む、尾張徳川の歴史・文化を学び、名古屋城へ向かった。名古屋市の職員3名の案内で、平成26年完成予定のⅠ期工事（玄関・表書院・中之口部屋・溜之間等）の状況を、詳細に説明していただいた。本丸御殿は、昭和20年に空襲により天守閣と共に消失してしまったが、多くの写真や実測図が残されていたことから、史実に忠実な復元が可能となった。屋根の柿葺き、棟瓦の納まり、小屋組みの状況等、見学通路から間近に観ることが出来た。また、木材加工場も案内していただき、日頃の仕事と直接関連する会員も多く、時間を忘れて熱心に見学させていただいた。その後、名古屋能楽堂で、舞台・見所を見学、名古屋コーチンを肴に懇親を深め、一日目を終えた。

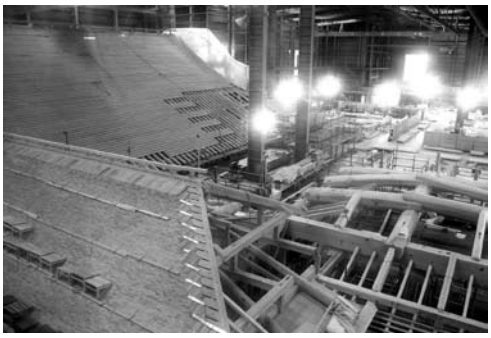
名古屋能楽堂　舞台・見所　を見学

研修旅行スナップ

２日目は、日本のモダニズム建築に多大な影響を与えた建築家　アントニオ・レーモンド設計の「神言神学館」を見学。杉板の打ち放しコンクリートとレンガ色の着色壁のシンプルな材料と、独創的な形態で、静かな素晴らしい祈りの空間を創出されていることに、一同感動。

保存再生改修工事が完成した槇文彦の代表作「名古屋大学　豊田講堂」、「文化の道槿木館」、ノリタケの森（ノリタケの食器おいしいランチも堪能）と盛り沢山の見学を終え、帰路についた。

徳川美術館にて



名古屋城本丸御殿　屋根は柿葺き　明治時代以降は瓦葺きであったが、400 年前の原形の復元された。

ノリタケの器でリッチな昼食

神言神学館にて

研修旅行日程

11月10日（土）　長野－徳川美術館－徳川園－名古屋城－名古屋能楽堂－鳥銀本店（名古屋コーチン料理）（泊）

11月11日（日）　神言神学院－名古屋大学　豊田講堂－文化の道槿木館－ノリタケの森－長野

平成 24 年度研修旅行「名古屋～歴史・文化に触れる旅」参加者名簿

（23 名。氏名・所属。順不同、敬称略）

鎌倉良収・（株）鎌倉材木店、岩井秀樹・岩井工業（株）、堀誠・堀幸一・寺澤正夫・建築工房アカシア、久保　美津季・宮本ちえこ・（株）さつき苑、小林充・北村英彦・（株）綿内瓦工業、五明良平・（株）五明、前島浅男・大工巧房、野本英一・（株）二見屋、北澤徹・北澤ステンレス工業、黒澤忠・クロサワメタル（株）、山本耕平・長野サウナ販売（株）、白石大陸・サンコー特機（株）、川上恵一・㈲かわかみ建築設計室、高木茂実・松田・南信（株）、手賀俊光・降幡建築設計事務所、長澤和芳・（株）角藤、倉橋英太郎・（株）倉橋英太郎建築設計事務所、西澤広智・唐澤尚生・事務局

新会長
土本俊和氏に聴く

伝統を現代の創造性にどう生かすか
－建築史家として設計も手掛ける－

信州大学工学部（長野市若里）　建築学科教授　土本俊和氏

profile●昭和36（1961）年10月2日生まれ、51歳。東京都出身。東大工学部卒。東大では毎日ラグビーに明け暮れ、４年生のときにはレギュラーとして公式戦に全試合出場。長野市内で夫人、娘さん（高2）、息子さん（中2）と4人暮らし。

信大工学部建築学科の研究室にて

創立 20 周年を迎えた信州名匠会の会長という重いバトンを、宮本忠長氏から託された。土本さんは、建築の歴史のほか、日本の伝統的建造物の保存（再生）や活用といった分野も専門としており、名匠会を引っ張る新しいリーダーの手腕に会員から大きな期待が寄せられている。

高２の終わりごろ読んだ加藤周一の『芸術論集』に建築のことがいろいろと書かれており、「なるほど面白いな、と感じて建築をやろうと思った」。加藤が説いたのはモダニズム一辺倒ではなく、「伝統を現代の創造性にどう生かすか」。高校が東大寺南大門のすぐ近くにあるという歴史的環境にも染まり、「非常に早い段階で、バリバリのモダニズムを目指す近代建築とは別の道を志していました」と振り返る。

「建築（設計）と研究の両方をやりたい」という学生時代の思いが今につながる。建築史家は研究を突き詰めていくほど、実際の建築から乖離してしまうという矛盾を抱えるという。「やはり原点は建築。古文書を読み解いて（伝統的な建物などの）保存といっても、利活用はどうするんだ？空き部屋はどうする？といった問題にも答えを示さなければ。実際に設計もして建築の基本的な部分を押えておくことはとても重要です」と語る。

建築学科の玄関にて

自身が設計を手掛けた上高地にある「徳本峠小屋」は、北陸建築文化賞を受賞した。「山小屋の設計は、研究者としても面白かった。骨太に、古材も使いまわしながら、時代のたまたま良かれと思われているような安っぽい価値観に引きずられることなく設計した。建築の基本に立ち返ることができました」と楽しそうに話す。

東日本大震災では、仮設住宅を見て大きな衝撃を受けた。「昔は、職人集団が出てきて仮設小屋（バラック）を建てる能力を持っていた。でも、今回の東北は、ほとんど全部プレハブ。できたハコを持ってきてポンと置くだけ。それは、人が生きるために必要な家をつくるという技術を、ある意味、生きる力を失っていることだと思う」と、震災ではからずも浮き彫りにされた技術継承の危機に警鐘を鳴らす。

「長野には、実際に木造がたくさんあり、伝統的な技術を応用できる場も残っています。幅広い職種でつくる名匠会に、古い技術を生かした、地域に根差した建築やまちをつくっていく母体としての役割が期待されているのです」。（関　卓実）

会員にきく
「たくみの仕事」Vol.22

宮本忠長に学び、名棟梁 中村外二とも仕事 －名匠会の発展支える－

有限会社 N設計　代表取締役所長　西澤嘉雄氏（長野市篠ノ井岡田）

profile●昭和26（1951）年12月6日千曲市八幡生まれ、61歳。建築家として、宮本事務所時代から続く坂城町のまちづくりにも精力的に関わっている。長野市で夫人、娘さん夫婦、お孫さんと5人暮らし。

本社にて。宮本氏にいただいた紹介状（手前）を額装して、大切に掲げている。

宮本忠長建築設計事務所に 33 年間勤務した後、独立。実弟が経営する積算事務所をアトリエ事務所に再編。所員６人を抱え、有限会社 N 設計代表取締役所長となる。宮本事務所から独立する際に、宮本氏が直々に得意先への紹介状を書いてくれた。「宮本学校」の卒業生としてのお墨付きをいただけたことを誇りに、日々精進している。また、宮本事務所在籍中は宮本氏の命により、信州名匠会創生期から事務局長として、会の発展を支えた。

若き 21 才で宮本事務所に入社当時受けた二級建築士の試験が心に残る。「湖畔に建つ週末住宅」をテーマに、図面を描く課題で、猛勉強をして本番に臨んだ。「審査員長だった宮本先生に、『すごい図面だ、うちにはすごいのがいる』と褒められたんです。本当にうれしかった。忘れられない思い出です」と当時を懐かしむ。

自他共に認める「木（木造）」のスペシャリスト。「設計者としては、すべての素材、構造をこなしますが、やはり木が大好き。木造のことは、とことん勉強しました」と笑顔で語る。「木は人間と共に生きていくもの。木と共に語り合えば素晴らしい建築をつくることができるんです」と言葉が熱を帯びる。

「一年ぐらいかけて図面を描いた」という広島銀行迎賓館（「騰々亭」）では、京都の数寄屋建築の名棟梁、故・中村外二氏と一緒に仕事をした。「中村棟梁が木組みを直に教えてくれたんです。日本の技はすごいと感動しました」と振り返る。「木の選び方を間近で学び、何度も京都に通って数寄屋建築の文化と真髄に触れた」ことが、大きな自信と財産になったという。

独り立ちはしても、宮本イズムが体にしみ込んでいる。「美・強・用」のバランスのとれた設計を常に説いた宮本氏の言葉を片時も忘れることはない。「絵を描くことはできても、実際につくるのは職人。職人のことを考えた図面（材料の納まり。1/1 のスケール）をいつも意識している」と話す。「そのせいなのか、自然と良い職人が寄ってきてくれるんですよ」と笑う。

信州名匠会については、「高齢化が大きな課題」と指摘。「技と自分を磨きたいと考える若くて良い職人は、県内にもまだまだいるはず。信州名匠会が、そうした職人たちが集う場の受け皿であってほしい」と強く願う。（関　卓実）

本社オフィスで、６人の所員と語り合う。チームワーク抜群、精鋭のプロフェッショナル集団だ。

定例研修会●Report

（平成24年12月～平成25年４月）

平成24年度第５回研修会
【寺社～東京駅丸の内駅舎保存復原工事】

平成24年12月19日
講師：水沢仁亮氏（㈱二見屋）・柳澤則光氏（㈱二見屋）
参加者：　23名

日本人の伝統美を守る職人の仕事

東京駅丸の内駅舎保存復原　銅板葺き工事

当会会員で、平成２１年に「半世紀にわたる建築板金工としての活動」が評価され、黄綬褒章を受章された二見屋の水沢氏に、善光寺等多くの寺社仏閣を手掛けてきたことや、今まで培ってきた伝統的な技術が、東京駅丸の内駅舎の仕事に生かされたことなどのお話を伺った。

東京駅は、1945年（昭和20年）戦災により一部消失した後、2階建駅舎に復興したものを、平成19年から5年、500億円の巨費を投じて、1914年（大正3年）に辰野金吾により設計された創建当時の姿に復元された。

この建物は、外壁の赤レンガ、黒い天然スレート屋根と、銅板が織りなすコントラストが美しく、この銅板葺き工事に全国から60人を超す職人が集められた。

この中の一人である、二見屋の柳澤氏に現場写真を観ながら、難しかった点や施工上のポイント等、貴重なお話を伺った。当初、現場で施工図を作成していたが、職人の経験の積み重ねで形を造る銅板葺では、図面通りでは納まらず、銅板で実物を造り確認し、職人がこれを基に作成したこと。現在、多く用いられている溶接工法は使わず、100年前の施工方法のはぜ組で施工されたこと等を伺い、大変な仕事であったことを実感した。

屋根銅板葺き工事は、1年半に及び、約1,500人工を要したという。水沢氏は、「この工事により、全国の若い職人が外へ出て行くことで、新しい工法技術を覚えることができた。大変意義があった」と結んだ。

平成24年度
【新年会】

平成25年１月23日
ホテル犀北館
参加者33名

若者が切磋琢磨する職人集団に

恒例の信州名匠会新年会がホテル犀北館で行われ、会員同士が親睦を深め、一年の抱負を語り合った。

和やかに語り合って親睦を深めた

冒頭、井内猛男副会長があいさつに立ち、「職人不足が叫ばれる今こそ、われわれのような匠の会が職人の実情を世の中に伝えなければ」と訴えた。乾杯の音頭を前に降幡廣信副会長は「誇りを持った人の仕事と持たない人の仕事の違いは歴然。全国の範たる会としてプライドを持って仕事に臨もう」と呼び掛けた。

新会員として、30代の若さながら社寺建築などで茅葺施工の豊富な実績を持つ米山智明さん（茅葺信州･伊那市）の紹介もあった。

平成24年度　第6回　研修会
【びんぐし湯さん館】

びんぐし湯さん館（坂城町）
平成25年3月2日
講師：西澤嘉雄氏（㈲エヌ設計、当会会員）
参加者：25名

10周年、リニューアルオープンを機に研修と懇親会

平成14年、当会名誉会長　宮本忠長が設計し開館。当時の担当者であった西澤嘉雄氏が昨年改修設計し、リニューアルオープンした坂城町の「びんぐし湯さん館」を見学した。温泉にゆっくりつかり「語り合う会」が催された。

最初に和室で、西澤嘉雄氏から、計画の経緯、計画概要、改修概要等が説明された。

湯さん館のあるこの地の山（びんぐし山）が、鬢櫛（びんぐし）の形に似ていることから館名が付けられたことや、信州名匠会の会員大勢に施工協力いただいていること、設計･ものづくりで工夫した点などについて話を伺った。

その後、普段、水着でないとなかなか見ることのできない運動浴場も見学させていただいた。歩行浴等、様々な用途に使用できるよう、床の高さが可変となっていることや、プールの形を卵型にしたこと等、ユニークな計画になっていることが紹介された。

館のご厚意で、和室で一同、おいしい昼食をいただいた後、リニューアルされた素晴らしい温泉を堪能し、建築のことや会のことなどを話し、懇親を深めながら、楽しいひと時を過ごした。

西澤氏の話に聞き入る会員

平成24年度 第7回・第8回 研修会
【「ともしび博物館」見学。村越先生の雪しろ窯を訪問】

平成25年4月13日(土)
参加者：17名

ともしび博物館（上田市武石。設計　宮本忠長建築設計事務所　1989年竣工）見学

のどかな里山を借景にした池の庭と、ともしび博物館

長野市から上信越道を約1時間半走り、山林に囲まれた「ともしび博物館」を訪ねた。ともしび博物館は、旧武石村（現上田市）の村政100周年を記念して公園に隣接した山林の中につくられた。体験学習館、展示館、伝承館、茶室などの建物が、高低差のある敷地内に自然の地形をいかして配置され、来場者は、草木が植えられた庭や鯉が泳ぐ池、周囲の自然などを楽しみながら見学する。

各展示館は、防火性能を考えRCで造られ、これを木組みで包み、この上に屋根付き切り妻の大屋根を架けることで、深い軒空間を造り出しコンクリート躯体を保護し、さらに人々の寄り付き空間を演出している。

建物の扉や壁等、館のあちこちに、切絵作家の柳沢京子氏のデザインが施され、特に、武石の四季に取材した切り絵を光で演出した「あかり幻想」は幻想的な雰囲気を醸し出している。

体験学習館で火おこし体験をしたり、うつしく精巧にできた灯具を鑑賞しながら建築空間を堪能し、園内を巡り、初春の心地よい日差しの中、気持ちよいひと時を過ごした。

火おこし体験会

雪しろ窯（村越久子氏の陶芸工房）昼食会

村越先生（右から２人目）からの贈り物を手に談笑する。

見学の後、毎年、陶芸教室を開いて頂いていた「雪しろ窯」へ向かった。

渓谷沿いに建つ陶芸工房は、まだ早いかと思った桜が開花し、天候に恵まれ大変美しかった。体調が心配された村越先生（雪しろ窯主宰、信州名匠会顧問）も大変お元気で我々を迎えてくれた。

昨年まで陶芸教室が行われた作業場で、先生に用意していただいた食事をいただき、作業場に飾られた初回の陶芸教室の写真や、去年の写真等を話題に思い出話しに花が咲いた。

先生が、ガラス細工で模様が入れられたカップ等をひとつひとつ丁寧に梱包した素敵な贈り物を、一人一人に用意してくださり、それをみんなでくじ引きをし、先生が一人一人に手渡した。

雪しろ窯の満開の桜を前に、村越先生を囲んで。

贈り物をいただいた参加者が、それぞれ先生との思い出と感謝の気持ちを伝え、みんなの心に残る大変楽しく思い出深い食事会となった。

【出澤潔氏 旭日双光章を受賞】

当会会員の出澤潔氏（佐久市、出澤潔建築設計事務所）は、先ごろ、2013年春の叙勲で「旭日双光章」を受賞した。2005年から4年間、県建築士会会長を務め、貢献した実績などが高く評価された。

会員の動向（平成24年7月～平成25年6月。敬称略）

○担当者の変更　賛助会員　(株)本久　前任・竹内光平／新任・荒井孝明
○入会　個人会員　米山智明・茅葦信州／〒399-4431　伊那市西春近2016-4／TEL・FAX　0265-98-0724
○退会　個人会員　東出輝彦／ステンドグラス作家（安曇野市穂高）

たくみ No.032 信州名匠会ニュース
発行日：平成25年6月25日
発行者：信州名匠会　会長　土本俊和
編集者：信州名匠会事務局
制作協力：文屋　木下豊・新建新聞社　関　卓実・スタジオスペースツー　吉田雅彦
連絡先：（株）宮本忠長建築設計事務所
事務局：西澤広智・中山貴史・中村明穂
〒381-0012 長野市柳原1875-1
TEL：026-241-5510
FAX：026-243-0187